2024年4月7日 久宝教会 復活節第２主日礼拝メッセージ

「見たから信じる、見ないで信じる」　　牛田匡牧師

聖書　ヨハネによる福音書 20章 19−31節

４月に入り、とても暖かい日が続いています。昨日もこども園で新年度の入園式がありました。入園や入学式の季節となり、今年はまだ桜の花が散ってしまう前に、おめかしした姿で写真を撮ることができているようです。教会では先週「イースター」を迎え、華やかで嬉しい気分にあふれている、そんな季節です。しかし、その一方で「イースターって何ですか」「復活って何ですか」と質問されると、分かりやすくどのように答えたらよいのか、すぐには説明できないもどかしさも感じてしまいます。

よく「イエス様の復活がなければ、キリスト教は無かった」という言葉を聞きます。その通りです。今から約 2000 年前の当時、古代イスラエル社会を支配していたローマ帝国に対して、多くの人たちが抵抗運動を起こしましたが、その全ては強大な軍事力によって鎮圧されました。福音書の中では、十字架はイエス様とその両脇との3本しか描かれていませんが、実際にはローマの権力に逆らった人たちは皆、政治犯として見せしめの十字架刑に処せられたので、丘の上に十字架がズラリと並ぶ光景が見られたそうです。そして、そのような抵抗運動は全て、指導者たちの処刑によって、解散・消滅して行きましたが、唯一イエス様から始まった「イエス運動」だけが、その処刑の後も解消することなく、その運動を引き継いだ後継者たちによって、継続されていきました。「イエス運動」とその他の政治運動との違いは何か。そこにあった決定的な違いが、イエス・キリストの「復活」に他ならないと言われています。

では、その「復活」とは一体何だったのでしょうか。それは死んで動かなくなった人の肉体が再び起き上がって動き出すという「蘇生」のことではありません。福音書でもイエス様の「復活」は、お墓に納めていたはずの「遺体が無くなっていた」、「遺体を包んでいた布だけが残されていた」と記されているだけで、「一度死んだ体が再び動き出した」とは書かれていません。「ヨハネによる福音書」20 章 14

節では、空の墓の前で泣いていたマグダラのマリアは、振り返ると復活した「イエスの立っておられるのが見えたが、それがイエスだとは分からなかった」（ヨハネ20：14）という、何だかよく分からない表現で記されています。「見えたのに分からなかった」「分からなかったのに見えた」と書かれていますから、「勘違いしたのか」「涙で良く見えなかったのか」などと考えてしまいますが、要するに生前の姿、「肉体が蘇生するのではない」ということでしょう。それでいてなお、イエス様は復活され「死んでいない」、「殺されて終わりではない」ということ、それはつまり言い換えるならば、その生き様、言葉と振る舞いは決して水の泡になってはいない、後に残された弟子たちと共に、今を生きる私たちと共に、確かに在り続けている、ということであり、それが「復活」という言葉の意味していることなのではないかと思います。

とはいえ、じゃあその「復活」したイエス様はどこにいるの、どこで出会えるの、という疑問が起こりますが、それに答えようとしたのが、今回のトマスのお話でもありました。弟子たちが復活のイエス様と出会った時、トマスはその場に一緒にいませんでしたので、彼はその話を聞きながらも、私は「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をその脇腹に入れなければ、私は決して信じない」（25）と言い張っていました。そしてその 8 日後に復活のイエス様が、今度はトマスの前に現れ、「あなたの指をここに当てて、私の手を見なさい。あなたの手を伸ばして、私の脇腹に入れなさい」（27）と言って来た。そしてその上で、更に「（あなたは）私を見たから信じたのか。見ないで信じる人は、幸いである」（29）と言われました。この最後の言葉からは、「見ないで信じるのが一流で、見たから信じるのは二流だ」というような評価が読み取れます。でも何故、わざわざそのようなことが記されたのでしょうか。それはイエス様の十字架と復活の後の、初代教会において、「私は復活の主を見た。私は確かに出会った」と言って、「自分たちこそがイエス様の正統な継承者だ」と自らを権威付けて主張する人たちがいたからなのだそうです。そのために、そのような自負をしている人たちに対する批判として、この言葉が記されたのだろうと考えられています。

だとすると、何故イエス様は、わざわざトマスの前に現れ、「あなたの指をここに当てて、私の手を見なさい。あなたの手を伸ばして、私の脇腹に入れなさい」（27）と言ったのでしょうか。それこそ姿を現わすこともせずに、姿は見えないけれども、天からの光や声でもって自分の復活を彼に知らせることだって出来たのではないかとさえ思ってしまいます。そのように細かい所に注目し始めるとキリがありませんが、そもそも福音書が記されたのは、今から 2000 年も前のことです。さらに当時のほとんどの人は読み書きが出来ませんでした。人々の口から耳へ、耳から口へとお話が語り継がれていく生活の中で、このトマスの元来の伝承としては、「イエス様が復活されたらしい」「弟子たちが出会ったそうだ」「その手と脇腹には穴が開いていたから、あのイエス様で間違いないだろう」という程度の情報だったのだろうと思われます。その上で「イエス様の姿を見たからといって偉いのではない。たとえ見なくたっていいじゃないか」という結論が付け加えられたのではないかと思います。

「『見たから信じる』のと『見ないで信じる』のでは、どちらが上で、どちらが正しいか」ということではなく、一番大切なことは「確かにイエス様は復活しておられる」、「殺されて終わりになってしまっているわけではない」ということなのだろうと思います。それこそ、毎年クリスマスに子どもたちにプレゼントを届けてくれるサンタクロースと似ているのではないでしょうか。子どもたちはサンタさんが「いる」ということを知っています。絵本の中や、時にはテレビの中にも出て来ることもありますし、保育園や学校にも姿を見せることがあるかもしれません。でも、クリスマスの夜に、自分の所へプレゼントを届けに来てくれた時に出会うことはありません。直接、その姿を見たことはなくても、朝、自分宛てのプレゼントが確かに届いていることによって、子どもたちはサンタさんの存在を信じています。サンタさんの姿を「見たから信じる」のでも、「見ないで信じる」のでもなく、「プレゼントがある」という事実によって、サンタさんは確かに存在しているのです。

復活のイエス様と私たちはどこで出会えるのか。イエス様は「自分たちもイエス様のように捕えられ、痛い目に遭わされるのではないか」と恐怖に怯え、家の戸と

いう戸に閂をかけて、閉じこもり、引きこもっている人たちの中に現れます。そのような人たちの中心、真ん中に、傷つけられたままの姿で現れ、「あなたがたに平和があるように」と言われます（19）。強大な軍事力をもって、相手を制圧することが「平和」と言われていた時代に、それとは正反対の姿で現れ、そして「天地創造」のお話の中で神様が「土人形」に命の息を吹き入れて「人間」を生きる者としたように（創世記 2 章）、恐怖に怯えていた弟子たちに、命の息（聖霊）を吹き入れて、力強く立ち上がる者とされました（22）。

「復活」とは、死や眠りからの引き起こしであり、立ち上がらせです。死で終わらない命があり、死を越える命があるということを、イエス・キリストはその身をもって示されました。そのイエス様が今も確かに私たちと共におられます。そのことに信頼して、私たちは今日もここから、平和を創り出す歩みへと送り出されて参ります。